

Title	インドシナ諸言語におけるいわゆる受動動詞について
Sub Title	The so-called passive verbs in some Indochinese languages
Author	三上, 直光(Mikami, Naomitsu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.360(57)- 380(37)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0380

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

インドシナ諸言語における いわゆる受動動詞について

三 上 直 光

0. はじめに

東アジア大陸の言語の多くが系統上の違いを超えた類似性を示し、それが語彙だけでなく、音組織、造語法、統辞法などの言語構造全般にわたって見られることは、よく知られている。形態素が単音節的であるとか、形態構造が孤立語的であるとかいったことのほか、類別詞や coverb の使用、声調の存在、反復による単語形成、連動構文などの事象も、この地域に話される言語に広く共通した言語特徴となっている。

一般に、言語の間の類似性は、親縁関係、接触(借用)、偶然の一致などの可能性によって説明される。東アジア諸語の場合には、歴史的に密接な接触を保ちながら発展を遂げてきたという事情から、言語間の接触ということがよく問題にされるが、構造が単純で似通っている上に、古い言語資料を欠くという悪条件が重なり、借用関係を明らかにすることはおろか、ある現象が借用によるものか否かを決定することさえ困難な場合が少なくない。

この状況は、ここで取り上げるインドシナ諸言語(カンボジア語、タイ語、ラオス語、ベトナム語、白苗語)のいわゆる「受動動詞」についても当てはまる。⁽¹⁾すなわち、これらの言語の間には、受動動詞として用いられている形式の意味・用法に関して、ある共通した特徴が観察されるが、それが相互影響の結果であるか、あるいは個々の言語が独自に発達させたものであるかを決定する根拠を見出すことは極めて難しい、ということである。

本稿では、この問題を考える際の素材を提供するという意味で、どのような意味特徴を持つ形式が受動動詞として用いられているかを、それぞれの言語で確認することに重点を置いて、議論を進めることにする。具体的

には、

$NP_1 + V_1 + NP_2 + V_2$ (NP=名詞句, V=動詞)

という連鎖 (例えば、「私の母」+ V_1 + 「彼」+ 「殺す」) から成る文において、各成分の間に、 $\langle NP_1$ (受動者) が NP_2 (動作主) による V_2 (他動詞) の影響を (典型的には、被害として) 直接受ける $\rangle$ という意味関係が認められるときに、 V_1 の位置に現われる動詞を分析の対象とする。この統語的、意味的条件を満たす各言語の形式は次の通りである。

1. カンボジア語: trəw
2. タイ語: thùuk
3. ラオス語: thûuk
4. ベトナム語: bĩ
5. 白苗語: raug

また、タイ語、ラオス語、ベトナム語については、上の形式を、それと意味的な関連性を持つ tɔŋ (タイ語), tɔŋ (ラオス語), phǎi (ベトナム語) と対比させながら分析する。これらの形式を加えることにより、とりわけ言語間の対照が一層興味深いものになるのである。

1. カンボジア語: trəw

まず、trəw には、主体 (具体物) と対象 (具体物) との物理的接触を表わす用法がある。

- (1) thmɔɔ (石) thlɛ̀ək (落ちる) trəw kbaal (頭) khñom (私)
 $\langle$ 石が落ちて、私の頭に当たった $\rangle$
- (2) phliəŋ (雨) thlɛ̀ək (降る) trəw thpɔəl (頬) khñom (私)
 $\langle$ 雨が私の頬に当たった $\rangle$
- (3) thɔaj (日) caŋ (輝く) trəw mɔk (顔) khñom (私) <日
が私の顔を照らした $\rangle$

上例はいずれも、何らかの働きを帯びた主体が対象に向かって移動し、接触することを表わしている。

次の例(4)では、銃を撃った結果、弾丸が鳥に接触するのである。

- (4) khñom (私) bañ (撃つ) kamphlǽŋ (銃) trəw satslaap (鳥)
〈私は鳥を撃ち当てた〉

これらの例から、2 者の間の接触は一方が他方の範囲内に位置することによって生じることが分かる。この特徴は、次のような抽象物を対象とする非物理的用法では2 者の〈合致〉という比喩的な意味として現われる。

- (5) khñom (私) trəw chnaot (籤) 〈私は籤に当たった〉
(6) lòok (あなた) mǝk (来る) trəw pèel (時間) 〈あなたはちょうどいい時に来た〉
(7) thnam (薬) nih (これ) trəw nwŋ (～に) cǝmɣuu (病気) phdaasaaj (風邪) 〈この薬は風邪に効く〉
(8) ～ trəw phnǽk (目) 〈～が目を楽しませる〉
(9) mhoo (料理) nih (これ) trəw mǝt (口) khñom (私) 〈この料理は私の口に合う〉
(10) ʔaaw (服) nuh (あれ) trəw cǝt (心) khñom (私) 〈あの服は私が気に入っている〉

(5)は、「私の籤」と「当たり籤」が、(6)は、「あなたが来た時」と「ちょうどいい時」がぴったり合うことを意味し、ある範囲の中の一点との一致が問題になっている。(7)では、「薬の効用」と「風邪の症状」との間に合致が認められる。(8)～(10)は一定の基準に適合するという意味で用いられている。主体の表わす事物や事柄が、視覚 (例(8)), 味覚 (例(9)), 感情 (例(10)) の許容する範囲内に受け入れられるのである。

trəw の持つ〈合致〉の意味は、trəw knǽa や trəw cǝa という表現にもよく現われている。

- (11) jǝobol (意見) jǝəŋ (我々) trəw knǽa (互いに) 〈我々の意見は一致している〉
(12) pii (2) nǽk (人) nuh (あれ) trəw knǽa (互いに) 〈あの2人はうまが合う〉
(13) kǝt (彼女) trəw cǝa (～である) miŋ (叔母) khñom (私)

〈彼女は私の叔母にあたる〉

- (14) muəj (1) book (加える) nuŋ (~に) pii (2) trəw cèə (~である) bəj (3) <1 足す 2 は 3 である〉

(11), (12)では、2 者の間に〈調和、一致〉の関係が、(13), (14)では、〈対応、一致〉の関係がそれぞれ看取される。

これまでに挙げた例においては、〈合致〉の対象は形の上に表わされていたが、それを明示しない用法も trəw にはある。それは〈正誤〉が問題になる場合で、否定できない絶対的な基準（事実など）が〈合致〉の対象として trəw に内在化しているとみることができる。

- (15) lòok (あなた) niʔjèəj (言う) trəw 〈あなたが言うことは正しい〉

- (16) cəmləəj (答え) lòok (あなた) mun (否定) trəw tèe (否定)
〈あなたの答えは正しくない〉

以上の分析に基づいて、trəw が〈一方の位置が他方の範囲に一致することによって生ずる接触〉を基本的な意味特徴として持ち、そこから〈2 者の合致〉という比喩的な意味が派生した、と仮定することができる。

ところで、上掲の(1)~(3)の例で観察したことは、主体から対象への移動による接触ということであった。このことは次の例文(17)についても同様に言えるが、この文は逆に対象が移動して主体に接触することを表わしている。

- (17) kbaal (頭) khñom (私) trəw pruəñ (矢) 〈私の頭は矢に当たった〉

具体物が接触する場合には、主体か対象いずれかの移動が前提とされるが、(17)は「私の頭」と「矢」の接触行為を叙述するのみで、移動の主体や方向については何も言っていないのである。母国語話者は「矢が飛んで来て、私の頭に当たった」と解釈するのが普通のようなのであるが、これは「矢」の動的性質をまず思い浮かべるからであろう。いずれにしても、主体である「私の頭」は「矢」の作用の中に置かれ、接触による影響を受けるという意味で、受動的立場にあると言える。

trəw の持つこの受動的意味は、(17)と同じく具体物の接触を表わす(18)~(20)の例にも窺われる。

(18) ~ trəw phliəŋ (雨) <~が雨にあう>

(19) ~ trəw rōmpɔət (鞭) <~が鞭をあてられる>

(20) ~ trəw ɔntɛək (罾) <~が罾に掛かる>

主体と対象との関係は、次の例に見るように、必ずしも物理的接触によって結ばれるものでなくとも構わない。

(21) ~ trəw snae (呪文) <~が呪文にかかる>

(22) ~ trəw tōoh (罰) <~が罰せられる>

(23) ~ trəw kdəj (訴訟) <~が訴えられる>

要するに、(17)~(23)の用例に共通する重要な特徴は、主体が対象の作用の範囲内に位置し、それと何らかの関係を持つ状態にあるということであり、対象が具体物であるか、抽象物であるかは問題ではないということになる。さらに注意すべきは、主体と対象との関係は、主体からの意図的な働きかけによって生じるのではなく、対象からの作用が一方的に主体に及ぶことによって生じるという点である。受動の意味での trəw が好ましくない事態について用いられるのは、この「主体の意のままにならない、対象からの一方的な働きかけ」という特徴に由来しているのではないかと思われる。

この意味特徴は、trəw に動詞が後続する場合にも同様に観察される。

(24) khñom (私) trəw baek (割れる) kbaal (頭) <私は頭を骨折した>

(25) sɔɔm (ソーム<人名>) nuuk (思う) ɔaanət (同情する) muut (友) kamməkɔɔ (労働者) krɔɔ-lōmbaak (貧しい) kròp-kròp-knèə (すべて) dael (関係詞) trəw thlɛək (落ちる) khluən (自分) təw-cèə (~になる) khñom-kəmdɔɔ (下僕) rəɔbɔh (~の) ɔɔmnaac (力) tuuk-prak (金銭) … <ソームは金力の下僕となったすべての貧しい労働者に同情した> (福田：1976, P.6)

trəw に後続する動詞句によって表わされる事態は、主体側の意志とは無関係に降りかかって来るものであって、主体はそれに意図的に関与できな

い、無意志的、受動的立場に置かれているのである。換言すれば、主体はその事態の影響を受けざるを得ない、また受けるしかない状態に追い込まれているわけである。上例(24), (25)においては, traw の主語(24では khñom, 25では mutt kamməkəw) が「不可避免的で、選択の余地のないもの」として受ける事象は主語自身による行為であるが、その事象が第3者から主語に向けられる行為である場合に、一般に言う「受身」の表現が成立する。

- (26) khñom (私) traw kəat (彼) vèaj (なぐる) <私は彼になぐられた>

統語的には、(24)～(26)は

NP_1 traw [sNP_2 V NP_3]

のような構造を持つと仮定し、主文の主語と同じ補文内の名詞句((24), (25)では NP_2 , (26)では NP_3) が消去されて表層文が派生されると考えることにする。

traw に観察される「不可避免的で、選択の余地のない事象」という特徴は、traw の持つ他の意味、<義務> および <確実性> にも通じる。すなわち、動詞句の内容を不可避免的なものとして、話者が主体に課するのが <義務> の表現であり(例(27))、文の内容を選択の余地のない必然的な事態として、話者が主張するのが <確実性> の表現である(例(28))、と考えられる。

- (27) khñom (私) traw təw (行く) phsaa (市場) thəaj-nih (今日)
<私は今日、市場へ行かなければならない>

- (28) baə (もし) lòok (あなた) ñam (飲む) thnam (薬) nih (これ) traw cəə (治る) haəj (完了) <あなたは、この薬を飲めば治るに違いない>

以上の考察から、traw が<接触>を基本義として持ち、それによって種々の用法が説明されうということが明らかになったと思われる。

2. タイ語: thùuk, tɔŋ

カンボジア語の traw に対応するタイ語の形式は、thùuk と tɔŋ である。以下では、両形式を比較対照しながら、意味・用法上の違いを考えてみる

ことにする。⁽²⁾

主体が移動して対象に接触するという意味での用法は両形式に見られるが、thùuk が日常語的であるのに対して、tōŋ は文学的なニュアンスがある。⁽³⁾

(1) baj (葉) māj (木) lòn (落ちる) thùuk/tōŋ hũa (頭) kháw (彼) <木の葉が落ちて、彼の頭に当たった>

(2) nám-fõn (雨水) yòt (垂れる) thùuk/tōŋ nãa-phàak (額) kháw (彼) <雨水が垂れて、彼の額に当たった>

(3) sěeŋ-děet (日光) sòŋ (照る) thùuk/tōŋ nãa (顔) kháw (彼) <日光が彼の顔を照らした>

しかし、次の例では、tōŋ は用いられない。

(4) kháw (彼) jīg (撃つ) krasũn (弾丸) thùuk nók (鳥) <彼は鳥を撃ち当てた>

また、ある範囲の中の一点との合致という意味でも、thùuk しか使えない。

(5) thùuk lóttərĩi (籤) <籤に当たる>

(6) maa (来る) thùuk weelaa (時間) <ちょうどいい時に来る>

一定の基準との適合という意味は両方の形式で見出されるが、この場合も、thùuk が口語的で、tōŋ が文語的であるという文体上の差が認められる。

(7) thùuk taa : tōŋ taa (目) <目を楽しませる>

(8) thùuk pàak : tōŋ pàak (口) <口に合う>

(9) thùuk caj : tōŋ caj (心) <気に入る>

次の例⁽¹⁰⁾では、thùuk を tōŋ で置き換えることはできない。

(10) khuan-càʔ (~すべきである) tham (する) ʔaraj (何) hãĩ (~のように) thùuk kòtmǎaj (法律) <何でも合法的にやるべきである>

(11), (12) における tōŋ kan, thùuk kan は 2 者の調和、一致を表現する形式である。

(11) khwaam-hěĩ (意見) raw (我々) tōŋ kan (互いに) <我々の意

見は一致している>

- (12) sǎɔŋ (2) khon (人) nán (あの) thùuk kan (互いに) <あの
2人はうまが合う>

(11)では thùuk を, (12)では tɔŋ を使いにくいようであるが, これがなぜかは明らかでない。

thùuk は単独で<正しい>という意味を表わすが, tɔŋ にはそのような用法はない。⁽⁴⁾

- (13) kham-tɔɔp (答え) khǒɔŋ (~の) khun (あなた) mǎj (否定)
thùuk (正しい) <あなたの答えは正しくない>

次に, thùuk, tɔŋ が受動的意味で使われる場合の用法を検討してみよう。

具体物の接触を表わす用法は, thùuk には普通に見られるが, tɔŋ の場合は文学的ニュアンスを帯びる。

- (14) thùuk/tɔŋ nám-fon (雨水) <雨水に当たる>
(15) thùuk/tɔŋ sǎaj (線) faj-fáa (電気) <電線に当たる>
(16) thùuk/tɔŋ sǎɛŋ-dêet (日光) <日光に当たる>
(17) thùuk/tɔŋ puun (銃) <銃に撃たれる>
(18) thùuk/tɔŋ lom (風) <風に当たる>

対象が抽象的な事柄を表わす用法は, 次の例に見られる。

- (19) tɔŋ thōot (刑罰) <刑罰を受ける>
(20) tɔŋ khadii (訴訟) <訴えられる>
(21) thùuk sanèe (呪文) <呪文にかかる>

(19), (20)は書き言葉的で, 形式ばった感じがある。⁽⁵⁾

両形式とも動詞との共起が可能であるが, thùuk が本稿の冒頭に示した統語的, 意味的条件のもとで一般的に用いられているのに対して (動作主は省略することも可能), tɔŋ の場合にはごく限られた動詞との緊密な結合という形で, 形式ばった固定表現として定着しており, 後続される動詞との間に動作主を挿入することも許されない。⁽⁶⁾

- (22) kháw (彼) thùuk/tɔŋ hǎa (訴える) wāa (~と) khāa (殺す)
khon (人) taaj (死ぬ) <彼は殺人のかどで告訴された>

(23) kháw (彼) thùuk/tōŋ sǒŋsǎj (疑う) wāa (～と) pen (～で
ある) khamooj (どろぼう) 〈彼は窃盗の容疑を掛けられた〉

両形式の違いはさらに、tōŋ が thùuk にはない意味、〈義務〉(例(24))及び
〈確実性〉(例(25))を持つ点にも認められる。

(24) chán (私) tōŋ paj (行く) talàat (市場) wan-níi (今日) 〈私
は今日、市場に行かなければならない〉

(25) thāa (もし) khun (あなた) kin (飲む) jaa (薬) níi (この)
kǎo (それなら) tōŋ hǎaj (治る) 〈あなたはこの薬を飲めば、治
るにちがいない〉

以上の観察を要約すると、次のようになる。thùuk と tōŋ は〈接触〉、〈受
動〉の意味を共有するが、thùuk が日常語的であるのに対して、tōŋ は文語
表現や固定表現にその意味の痕跡を止めるに過ぎず、現代語ではもはや生
産性を欠いていると考えられる。現代においては、tōŋ は〈義務〉、〈確実性〉
を表わし、〈接触〉、〈受動〉を表わす thùuk との間で、意味上の分担がなさ
れていると言うことができる。(7)

3. ラオス語: thuuuk, tōŋ

ラオス語はタイ語と極めて近い親縁関係にあり、またここで取り上げる
ラオス語の thuuuk, tōŋ も、それぞれタイ語の thùuk, tōŋ と同語源であ
ることから、対応形式間の意味・用法上の類似性が予想される。事実、タ
イ語で検討した(1)～(23)の用例において、動詞として thuuuk を使い、その他
の語もラオス語の対応語彙で置き換えると、そのままラオス語の表現とし
て成立するといった具合である。thuuuk の使用については、インフォーマ
ント(3人のラオス人に協力を頂いた。便宜上、A氏、B氏、C氏と呼ぶ。)の
意見は一致したが、tōŋ の許容度については個人差が見られた。A氏は
いずれの例においても、tōŋ は容認しなかったが、B氏は(7)～(9)及び(19)、
(20)(タイ語の用例番号)では tōŋ は容認可能と判断し(但し、自分は使わ
ない)、やや文語的な響きがあるという注釈を付け加えた。C氏は物理的接
触を伴う用例及び(19)、(20)で tōŋ を使うが、前者の場合には、接触による衝

撃が弱いという感じがすると報告した。⁽⁸⁾

いずれにしても、現代語においては、〈接触〉、〈受動〉の意味での *tòng* の用法は極めて制限されており（〈義務〉、〈確実性〉の用法が一般的である。）、この点タイ語と類似した状況を認めることができる。

4. ベトナム語 : *bị*, *phải*

ベトナム語の受動動詞として真っ先に取り上げられるのは、*bị* と *được* であろう。*bị* は漢字「被」の漢越音であり、また *được* も漢字「得」に起源を持つ越化音（「得」の漢越音は *đắc*）とされ、それぞれ〈被むる〉、〈得る〉を基本義として持っている。そして、この両形式は受動文においては、文の主語あるいは話し手が、ある事象を〈好ましくない〉と見るか、〈好ましい〉と見るかによって使い分けられている、とすることができる。*bị*, *được* のほかに、*mắc*, *chịu* も「受動的意味を持つ語」として言及されることがあるが、ここでは、Nguyễn Tài Cẩn (1978) によって、*bị* と同語源の語である（つまり、「被」に溯る）と仮定された *phải* を *bị* と対比させながら、両者の意味特徴を考えてみることにする。⁽⁹⁾

bị と *phải* が意味的に極めて近い語であるということは、それらが同一の対象物について用いられることから分かる。次の例は、Trương Văn Chình (1970, p.391) で同義として扱われているものである。

- (1) *phải nan* : *bị nan* (災難) 〈罹災する〉
- (2) *phải đòn* : *bị đòn* (鞭打ち) 〈鞭を当てられる〉
- (3) *phải án tù* : *bị án* (判決) *tù* (監禁する) 〈監禁の刑に処せられる〉
- (4) *phải gai* : *bị gai* (とげ) 〈とげが刺さる〉
- (5) *phải gió* : *bị gió* (風) 〈中風になる〉

これらの例は、主体がその意志とは無関係に、好ましくない事態を受ける、被むるという特徴を共有している。*bị*, *phải* がこの意味で用いられるときには、両動詞は常に交換が可能というわけではなく、後続する名詞によっては、いずれか一方としか結び付かない場合もある。Trương Văn

Chính は、いずれを使うかは習慣的に決まっているとして、次の例を挙げている。

- (6) bị hỏa tai (火災) <火災に遇う>
- (7) phải bả (毒物) <毒を盛られる>
- (8) phải bùa (護符) <呪文をかけられる>
- (9) phải phạt (罰金) <罰金を課せられる>

(6)では, phải の方が bị より好まれるが, (7)~(9)はその逆で, もし bị を使うとすれば, それぞれ bị đánh bả, bị bỏ bùa, bị phạt phạt (下線部はそれぞれ <毒を盛る>, <呪文をかける>, <罰金を課する> という意の動詞表現, となろうと述べている。

現代語における bị と phải の用法をさらに複雑にしている要因に, 文体並びに方言の差異といった問題がある。すなわち, 文体的には, phải が古くなくて, 文語的であるのに対して, bị は現代的で口語的であること, そして方言的な差異に関して言えば, phải は北部的で, 南部では専ら bị が使われるという違いがある。さらに, 「名詞との結合度」という点から見ると, phải の方は緊密で固定的であるが, bị は緩やかで独立性が強いと感じられているようである。

ここで, bị には見られない phải 固有の用法を検討してみよう。

- (10) gặp (会う) phải bạn xấu (友達) <悪友に会ってしまう>
- (11) giẫm (踏む) phải gai (とげ) <とげを踏んでしまう>
- (12) mó (触る) phải cái (類別詞) đinh (釘) <釘に触ってしまう>
- (13) đọc (読む) phải quyển (類別詞) sách (本) dở (つまらない) quá (とても) <とてもつまらない本を読んでしまう>。

phải はいずれの例においても, 動詞の後, 名詞の前というと統語環境に起こっている。Văn and Nguyễn (1977) が, (10)と(11)の用例を載せ, この phải の用法に対して, “do không may” <不運にも> という意味記述を与えているように, 上例は好ましくない出来事に遭遇するという意味を共通に持っている。

これまでは, phải がありがたくない事象について用いられる用例を検討してきたが, phải は常にそのような意味合いを含んでいるわけではない。そのことを示す例として, 以下のようなものがある。

- (14) phải lẽ (道理) <理に適った>
- (15) phải đường (道) <適当な>
- (16) phải phép (法) <合法の>
- (17) phải thời (時間) <時宜に適った>

(14)~(17)からは, <一定の基準との合致> という意味特徴が抽出されるが, これはカンボジア語の trəw, タイ語の thùuk, ラオス語の thūuuk においても観察されたものである。

さらに興味深いことは, phải が <正しい> という意味を持っていることである。

- (18) nói (話す) phải <正しく話す>
- (19) điều (事) phải <正しい事>
- (20) Anh (あなた) là (~である) sinh-viên (学生) có (疑問) phải không (疑問)? -Phải. <あなたは学生ですか> <そうです>

このように見てくると, (1)~(5), (7)~(9)さらには(10)~(13)における phải の用法は, <接触>という基本義で説明されうるのではないかと思われてくるのである。⁽¹⁰⁾ すなわち, それらの例では, 主体と対象(事物, 事態)との接触が前提となっており, phải が好ましくない状況で使われているのは, phải が主体の意志の及ばぬ, 予期しない事象との接触を表わすという点に起因していると考えられる。

次に, bị, phải に動詞が後続する場合を見てみよう。

- (21) Nó (彼) phải đi (行く) đầy (流刑にする)。

この文は, <彼は流刑にされる羽目になった(受動)>とも, <彼は流刑にしなければならない(義務)>とも取れる (Trương Văn Chính : 1970, p.394)が, 前者の解釈の場合には, 現代語では bị を使うのが一般的である。<受動>の意味を表わす phải の用例として, Trương はさらに phải mắng (叱る) <叱られる> を載せ, また Lê Văn Lý (1972, p.80) は, phải bắt

(捕える)〈捕えられる〉や *phải đuổi* (追いかける)〈追いかけられる〉を、*bị* ほど強意ではないとして挙げているが、いずれも現代において常用される表現であるとは思われない。⁽¹¹⁾ *phải* が〈受動〉の意味での生産力を失いつつある一方で、*bị* は〈被害〉を表わす受動動詞として極めて一般的に用いられている。*bị* が生起する統語環境を統一的に処理するには、カンボジア語の *traw* と同様、次の構造を仮定するのが妥当と思われる。

$NP_1 \quad bị \quad [_s NP_2 \quad V \quad NP_3]$

そして、 $NP_1 = NP_2$ のときには NP_2 が、 $NP_1 = NP_3$ のときには NP_3 が消去されるという派生過程を経て、それぞれの表層文が得られることになる。

前者の例としては、

(22) *Giáp* (ザップ) *bị chết* (死ぬ). 〈ザップは死んだ〉

(23) *Nam* (ナム) *bị đi* (行く). (ナムは行く羽目になった)

(24) *Kim* (キム) *bị đau bụng* (痛い) (腹). 〈キムは腹が痛い〉

後者の例としては、

(25) *Giáp* (ザップ) *bị thầy-giáo* (先生) *đánh* (なぐる). 〈ザップは先生になぐられた〉

などを挙げることができる。

phải が動詞を従えて〈義務〉の意味を表わすことは(21)の例で触れた通りであるが、この他に、〈確実性〉の意味を表わす用法もある。

(26) *Dùng* (飲む) *thuốc* (薬) *này* (この) *thì* (～すれば) *phải khỏi* (治る). 〈この薬を飲めば治るにちがいない〉

以上、*bị* と *phải* の用法について、その概略を記述した。両形式は〈主体にとって好ましくない状況を被むる〉ことを共通の意味特徴として持っているが、これを Nguyễn Tài Căn (1978) が仮定するように、同一語源に由来すると考えるか、あるいは *phải* の基本義〈接触〉から派生した意味と *bị* の意味にたまたま重複が見られたとするかについては意見の分かれるところであろうと思う。ここでは、*phải* の種々の用法がその基本義で統一的に説明され得ることから、後者の可能性を代案として提出しておいたが、今その問題は措き、*bị* と *phải* を歴史的変遷という観点から見ると

ば、〈受動〉の意味においては、bì が phải の領域を奪い、その用法を拡大してきたという過程が推定される。このことは、bì が生産的で、phải が非生産的であるという現代語の状況に加えて、Nguyễn Tài Căn によって指摘されているように、古い文献が〈受動〉の意味を表わす phải の用例を多く載せている（一方、bì の用例は少ない）という事実によっても支持されよう。⁽¹²⁾ そして、現代においては、〈受動〉の意味を表わす bì と〈義務〉を表わす phải との間で意味上の分業が行なわれており、ここに、我々はタイ語の thūuk : tɔŋ, ラオス語の thuuuk : tɔɔŋ と類似した関係を見出すのである。

5. 白苗語 : raug

白苗語の raug については、主として Bertrais (1979) と Heimbach (1979) から借用した用例を、これまでの分析に従って整理したものを示しておく。

(1), (2) は物理的作用による接触を表わしている。

(1) Ib (1) lub (類別詞) pob-zeb (石) raug kuv (私) lub (類別詞) taubhau (頭)。〈石が私の頭に当たった〉

(2) Kuv (私) tua (撃つ) phom (銃) raug lawv (彼ら)。〈私が銃を放ったら、彼らに当たった〉

次の例(3)における raug は、感情的にある物事や事柄に接し、それを受け入れるという意味で用いられる。

(3) Nws (彼) ua (する) raug siab (肝臓)。〈彼のすることは気に入っている〉

2 者の間に食い違いがなく、調和が見られるという意味は、次の例に認められる。

(4) raug nws (彼) zoo (よい)。〈彼とうまが合う〉

(5) sib (互いに) raug zoo (よい)。〈お互いにうまが合う〉

絶対的な基準との合致を示す例としては、

(6) ua (する) xam-phaj (計算する) tsis (否定) raug 〈計算が合

わない>

- (7) Nws (彼) hais (言う) raug. <彼の言うことは合っている>
(8) Nws (彼) twv (推測する) raug. <彼の推測は当たっている>
を挙げることができる。

raug が受動的意味を表わす用例には、次のようなものがある。名詞が後続する例としては、

- (9) raug phom (銃) <銃で撃たれる>
(10) raug nkuaj (囲い, 監獄) <投獄される>
(11) raug dab (霊) <悪霊に取り付かれる>
(12) raug mob (病気) <病気にかかる>
(13) raug plaub (告訴) <告訴される>
(14) raug txim (罰) <罰せられる>
(15) raug lawv (彼ら) tswv yim (計略) <彼らの計略にはまる>
などがあり、動詞が後続する例としては、
(16) raug nplua (罰金を課す) <罰金を取られる>
(17) raug cem (叱る) <叱られる>
(18) raug kaw (閉める) <投獄される>

などがある。(16)~(18)の例においては、raug の後に、後続する動詞の動作主を置くことも可能である。⁽¹³⁾

以上見てきたことから、raug が <接触>、<合致>、<受動> の意味を持つことが明らかになった。しかし、<義務>、<確実性> の意味は派生させておらず、この点にタイ語の thùuk やラオス語の thùuuk との共通性が認められる。

お わ り に

以上、カンボジア語、タイ語、ラオス語、ベトナム語、白苗語において受動動詞に選ばれている形式の意味・用法上の特徴を概観した。いま、細かな相違を無視して、大雑把に言語間の対応をまとめると、次のようになる。以下、カンボジア語、タイ語、ラオス語、ベトナム語、白苗語をそれ

ぞれ C, T, L, V, M で表わす。

1. いずれの形式も〈接触〉を基本義として持っており、〈合致〉〈受動〉の意味は〈接触〉の意味からの発展であると考えられる。((V) bi は、語源的には他の形式と異なる。)
2. 〈受動〉の意味での用法は形式によって生産力に差がある。つまり、(T) tɔŋ, (L) tɔŋ, (V) phǎi は非生産的であり、(T) thùuk, (L) thùuk, (V) bi は生産的である。(もちろん、(C) trəw, (M) raug は後者の例である。)
3. (T) tɔŋ, (L) tɔŋ, (V) phǎi は〈義務〉、〈確実性〉の意味を派生させた点で共通している。
4. (C) の trəw は、〈接触〉、〈合致〉、〈受動〉、〈確実性〉すべての意味を持つ点で特異である。⁽¹⁴⁾

最後に、これらの言語において、いかなる条件のもとに受動文（ここでは、動作主を含む文を意味している）が成立するかについて簡単に触れておこう。この問題には、個人差や文体差などの要因が絡んでくるため、確定的なことは言えないのであるが、今後検討すべき課題として、次の2点を挙げておきたい。

第1点は、動作主による行為と受動者との関わり方についてである。これらの言語における受動動詞は、冒頭に述べた統語的、意味的条件を満たす文（いわゆる直接受動文）に現われるのが最も自然である。従って、日本語のような自動詞の受身（例えば、「私は子供に泣かれた」）はまず存在しない。そこで問題になるのが、NP₁ (受動者) + V₁ (受動動詞) + NP₂ (動作主) + V₂ (他動詞) + NP₃ (NP₁の身体部分/所有物) という連鎖で表わされる文、つまり動作主の行為が向かう直接の対象が受動者の身体部分や所有物である場合である。

(1) 私は彼に頭をなぐられた。

「私」+「受動動詞」+「彼」+「なぐる」+「頭」

(C) khñom trəw kɔət vɛəj kbaal

(T) chán thùuk kháw tii húa

(L)	khɔ̌ɔj	thũuuk	láaw	tii	hũa
(V)	Tôi	bị	anh ấy	đánh	đầu.
(M)	Kuv	raug	nws	natus	taubhaus.

(2)私は彼にお金を盗まれた。

「私」+「受動動詞」+「彼」+「盗む」+「お金」

(C)	khñom	trəw	kɔ̌ət	ruəc	lòj
(T)	chán	thũuuk	kháw	khamooj	gən
(L)	khɔ̌ɔj	thũuuk	láaw	khamɔ̌ɔj	gən
(V)	Tôi	bị	anh ấy	lấy cướp	tiền.
(M)	Kuv	raug	nws	nyiag	nyiay.

(3)私は彼に家を焼かれた。

「私」+「受動動詞」+「彼」+「焼く」+「家」

(C)	khñom	trəw	kɔ̌ət	đot	phtèəh
(T)	chán	thũuuk	kháw	pháw	bāan
(L)	khɔ̌ɔj	thũuuk	láaw	pháw	bāan
(V)	Tôi	bị	anh ấy	đốt	nhà.
(M)	Kuv	raug	nws	hlawv	tsev.

これらの文の許容度について、それぞれの言語の話者に尋ねたところ、次のような結果を得た。タイ語、ベトナム語ではどの文も適格と判断され、実際に使うという報告を受けたが、ラオス語では適格とする者とやや抵抗を感じる者とに分かれ、カンボジア語ではやや不自然で、まず使わないとのことであった。白苗語では、(1)は良いが、(2)、(3)の順に許容度が低くなり、(3)は容認されなかった。上で不自然と判定された例文においては、受動動詞を使わず、動作主を文の主語として据えるのが最も自然であり、受動動詞を使うとすれば、行為の直接の対象を表わす名詞句を主語にした方がよい((1)の例で言えば、「私の頭」+「受動動詞」+「彼」+「なぐる」となる)というのが一致した意見であった。いずれにしても、動作主による行為とその対象が直接的な関係で示されるか否かが受動文の成立、不成立と関係していることは間違いないと思われる。

第2点は、受動文が表わす状況に関することである。これらの言語における受動文はしばしば“adversative passive”と呼ばれるように、主体にとって好ましくない事象を表わすのが普通である。ベトナム語の *bị* は、その語義的特徴により〈被害〉の意味しか表わさないのであるが、他の言語の形式においてはそのような意味合いは薄らぐ傾向にある。おそらく、初期においては好ましくない事象について用いられたのであろうが現代語でも特に堅い文体特徴を持つ書き言葉や西洋語からの翻訳文では、〈被害〉に該当しない場合でも（特に中立的状況の叙述において、言語によっては好ましい状況を表わす場合でも）、受動動詞が使われているのが実情である。この現象は、西洋語の影響によるところが大きいと思われるが、今後話し言葉の領域にどの程度滲透、定着して行くかは興味の持たれるところである。

(15)

受動文の成立条件を考察するにあたっては、このほかにも各構成要素に課される意味的制約などが考慮されなければならないことは言うまでもない。

註

- (1) これらの言語の系統は、次の通りである。タイ語とラオス語はタイ (Tai) 諸語の南西グループに属し、構造上の類似性が著しい。カンボジア語とベトナム語はモン・クメール語族に分類されるが、両者の間にはかなりの隔りがある。苗語は、一般にはシナ・チベット諸語と親縁関係があると考えられているが、その位置は確定していない。ここで扱う苗語は、ラオスやタイ北部で話されている白苗語 (White Hmong) である。
- (2) タイ語では、〈ぶつかる〉を原義とする *doon* という形式も受動動詞として用いられ、*thùuk* と類似した意味・用法上の特徴を示すが、両者の違いについては、*doon* がより口語的な表現である点を除き、両者の違いについては詳しいことは分っていない。
- (3) *tōŋ* が持つ〈接触〉の意味は、*càp tōŋ*, *tê?tōŋ*〈触る〉などの複合語にも認められる。
- (4) 〈正しい〉という意味は、*thùuk* と *tōŋ* が結び付いた、複合語の形式 *thùuk tōŋ* によっても表わされる。
- (5) (19), (20)は、日常語ではそれぞれ *thùuk log* [あるいは *tham*] *thōot* (罰を

下す), thùuk hăa (訴える) と言う。

- (6) Bandhmedha (1984, P.70) には, phố (父) thùuk 2 3 3k (出る) càak (～から) paan (仕事)

〈父は仕事を辞める羽目になった〉のように thùuk の主語と 2 3 3k の主語が同一であると分析されうる例 (カンボジア語の用例(24), (25)に相当する) が見えるが, これを不自然と判定する母国語話者もいる。

tôŋ の〈受動的〉意味は, 次のような複合語にも認められる。phôu (人) tôŋ sỏ sỏ (疑う) 〈容疑者〉, phôu (人) tôŋ hăa (訴える) 〈被告人〉, khỏỏ (物) tôŋ hăam (禁ずる) 〈禁制品〉。

Pallegoix (1854) は, 〈受動〉の意味を表わす tôŋ と動詞の結合例として, tôŋ tii (なぐる) 〈なぐられる〉と tôŋ cam (投獄する) 〈投獄される〉を載せている。

- (7) スコータイ期碑文に見える thùuk, tôŋ の用例は, 次の通りである。〔 〕内の数字は, 左から碑文番号, 面数, 行数を示す。転写は現代音。

thùuk : [1 / 3 / 8] phalii (供物) thùuk (正しい) 〈供物が正しい〉
[2 / 1 / 68] thùuk (当たる) hủa (頭) 〈頭に当たる〉
tôŋ : [2 / 2 / 20] tôŋ (合う) caarít (慣習) 〈慣習に合う〉
[3 / 2 / 33] tôŋ caj (心) 〈気に入る〉

- (8) A氏並びにC氏によれば, (12), (13)では thùuk tôŋ kan も, (22)では thùuk tôŋ も一般的に使われるという。

- (9) Nguyễn Tài Căn が bị と phải を同語源と見做す根拠は, 概略次の通りである。

「漢語では, 「被」は並母, 上声, 支母に属する。並母はベトナム語では普通 b, t になったが, ph になった例もある。声調については, 上声, 並母はベトナム語では ngã, nặng を持つのが普通であるが, hỏi になることもある。さらに, 支母は漢越音では i を原則とするが, i > ai の変化は既に証明されている。」

- (10) この仮説は, (14)~(20)の phải は別の語源に溯るとする立場とは相容れないものである。

- (11) Trương Văn Chính (1970, p.392) は, phải の用例として

Giáp (ザップ) phải thầy (先生) mắng (叱る) 〈ザップは先生に叱られた〉

を挙げているが, このように動作主を明示する用法は phải にはない(少なくとも現代語の用法ではない)として, ハノイ方言話者から拒否された。

- (12) Nguyễn Tài Căn (1978) を参照。そこでは, bị の形態素レベルから単語レベルの移行についても触れている。

- (13) raug の他に, mag (原義は〈罫に掛かる〉) という動詞も受動動詞として

用いられ、*raug* と同じ環境に起こりうる。(mag は常に〈被害〉の意味合
いで用いられる)

Kuv (私) *raug/mag nws* (彼) *ntanu* (なぐる), 〈私は彼になぐられた〉
(*nws* は省略可能)

- (14) 〈義務〉を表わす (T) *tɔŋ*, (L) *tɔŋ*, (C) *trəw*, (V) *phái* の前に否定
詞を置いた場合, (T), (L) では〈不必要〉を, (C), (V) では〈禁止〉
を表わすという違いがある。
- (15) ここでは, 第3者からの行為が文の主語に及ぶという意味での受動文を考
える。また, 以下に言う受動動詞とは, (C) *trəw*, (T) *thùuk*, (L) *thûuk*,
(V) *bj*, (M) *raug* の各語を指す。
- (16) Lekawatana (1979, p. 2) は,

dææŋ (デーン) *thùuk sūdaa* (スダー) *chəən* (招待する) 〈デーンは
スダーに招待された〉

という文(タイ語)は, 「デーンスダーに招待されたことを迷惑に感じて
いる」と話者が判断したときのみ適格であると述べているが, 母国語話
者の中にはそのような〈被害〉の意味を全く感じない(少なくともこの例
文に関しては)者もいる。個人差を生む要因としては, 世代差や西洋語と
の接触の度合など, 様々なものが考えられるが, 現段階でははっきりした
ことは言えない。

参 考 文 献

- Bandhumedha, Navavan. 1984. *Kan chai phasa* 2.
Bangkok: Samnakphim A-Lan.
- Bertrais, R. P. 1979. *Dictionnaire Hmong – Français*.
Bangkok: The Assumption Press.
- Clark, Marybeth. 1974. "Submissive verbs as adversatives in some Asian
languages" in Nguyen Dang Liem (ed.), *Pacific Linguistics, Series C*,
No. 31, *Southeast Asian Linguistic Studies*.
Canberra: The Australian National University.
- 福田権一. 1976. 「カンボジャ語の受動文について」中京大学文学部紀要.
第11巻第1号. pp. 1–21.
- Haas, Mary R. 1964. *Thai – English student's dictionary*.
Stanford: Stanford University Press.
- Headley, Robert K. et al. 1977. *Cambodian – English dictionary*.
Washington, D.C.: The Catholic University of American Press.
- Heimbach, Ernest E. 1979. *White Hmong – English dictionary*.
Ithaca, New York: Cornell University.

- Huffman, Franklin E. 1970. Modern spoken Cambodian.
New Haven and London : Yale University Press.
- Kerr, Allen D. 1972. Lao – English dictionary.
Wanhsington, D. C. : The Catholic University of America Press.
- Lê Văn Lý. 1972. Sơ thảo ngữ pháp Việt Nam.
Saigon : Bộ Giáo Dục.
- Lekawatana, Ponsri 1979. “The so-called passive in Thai” in Gething,
Thomas W. and Nguyen Dang Liem (eds.), Pacific Linguistics, Series A,
No.52, Papers in South - East Asian Linguistics, No. 6 : Tai Studies
in honor of William J. Gedney.
Canberra : The Australian National University.
- Nguyễn Đình Hoà. 1972. “Passivization in Vietnamese” in Thomas,
Jacqueline. M. C. and Lucien Bernot (eds.), Langues et Techniques,
Nature et Société, Vol. 1, Approche Linguistique.
Paris : Klincksieck.
- . 1972. “Vietnamese categories of result, direction, and
orientation” in Smith, M. Estelle (ed.), Studies in Linguistic in honor of
George L. Trager.
The Hague : Mouton.
- Nguyễn Tài. Căn 1978. “Quá trình hình thành thể đối lập giữa ba từ
‘được, bị, phải’ ” Ngôn Ngữ 2, pp.19—22.
- Pallegoix, Anctore D. J. B. 1854. Dictionarium linguae thai. Parisiis :
Jussu Imperatoris Inpressum in Typographeo Imperatorio.Sethaputra,
So. 1965. New model Thai – English dictionary.
Samud Prakan, Thailand : So Sethaputra’s Press.
- Thiengburanatham, Wit. 1986. A new Thai – English dictionary.
Bangkok : Ruamsan.
- Trường Văn Chinh. 1970. Structure de la langue vietnaienne.
Paris : Imprimerie Nationale.
- Trường Văn Chinh and Nguyễn Hiền Lễ. 1963. khảo luận về ngữ pháp
Việt Nam. Hue : Đại Học Huế.
- Văn Tân và Nguyễn Văn Đạm. 1977. Từ điển tiếng Việt.
Hà Nội : Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội.